

萩

Vol 7

ものがたり

萩と日露戦争

一坂 太郎



桂 太郎



田中 義一

山本 有朋



乃木 希典

伊藤 博文



ロシア兵が漂着した見島砂見田海岸

H2

シリーズ

萩

ものがたり ⑦

萩と日露戦争

一坂 太郎



萩・嚴島神社の日露戦役記念之碑

はしがき

本年平成十七年は日露戦争終結から百年にあたる。

山口県萩市は、全国の中でも日露戦争と大変ゆかりが深い地域だと思ふ。

第一に、日露戦争当時の軍部政界における主要人物の多くが、萩出身者であったこと。俗に「長州の天下」と呼ばれた時代で、日本の舵取が萩出身者の手で行われたのだ。

第二に、日露戦争最大の海戦である日本海海戦で敗れたロシア兵が、見島や須佐（いずれも萩市）に漂着した史実である。戦時下においてロシア兵と民間人が、こうした形で一瞬ではあるが交流を持ったという史実は、特筆に値するだろう。

以上の二点を概説するため、甚だ不十分ではあるが本書を著した。（一部は平成十七年七月から九月迄、「西日本新聞」紙上に不定期連載した「長州の天下」と呼ばれた時代」を大幅に改稿したものである）萩市というより山口県では明治維新までが「歴史」であり、日露戦争になるとなかなか注目が集まらない。そこで風化しつつある史実を、少しでも紹介しておきたいと考えたのだ。

さらに本年、萩博物館では小企画展「萩と日露戦争」を開催した。これを機に呼びかけたところ、市民の方からいくつもの貴重な情報や史料が寄せられている。いずれこれらを集めた、第二弾、第三弾が生まれる日を願ってやまない。

目次

はしがき

1. 日露開戦 4
2. 萩で学んだ乃木希典 13
3. 田中義一と日露戦争 23
4. 見島とロシア兵 28
5. 須佐とロシア兵 38
6. 講和締結とその後 46

1. 日露開戦

日露戦争とは

日露戦争とは明治三十七年（一九〇四）一月から翌三十八年九月にかけて、日本とロシアの間で、朝鮮・満州（中国東北部）の支配権をめぐり争われた戦争である。

日清戦争（明治二十七年・二十八年）で勝利した日本は、清国に遼東半島を割譲させる。

ところが理不尽にもただちにロシアが、利益を同じくするドイツ・フランスと共にその返還を日本に勧告して来た。この、いわゆる三国干渉を受けた日本は、洪々遼東半島を清国に返還するが、南下政策をとるロシアへの敵対心と危機感が強まった。

明治三十三年、中国で外国人排除を唱える義和団事件が起こると、ロシアは大軍を派遣して満州を事実上占領する。一方、日本はイギリス・アメリカの支持を得て、対露開戦を決意。日本海軍は明治三十七年二月、仁川沖・旅順港のロシア艦隊を奇襲し、「日露戦争」は始まった。

六月、陸軍は満州軍総司令部（総司令官大山巖、総参謀長児玉源太郎）を設置し、その指揮下に第一から第四軍を置き、兵力は十五師団におよんだ。

陸軍は遼陽・沙河・黒溝台の各会戦で苦戦のすえ、ロシア軍を退却させる。乃木希典が率いる第三軍は膨大な死傷者を出しながらも明治三十八年一月、旅順を占領、さらに三月には奉天会戦でロシア軍を破った。

海軍は明治三十八年五月、対馬海峡においてロシア艦隊と戦い、これを壊滅させた。いわゆる日本海海戦である。

しかし日本・ロシア共に兵力の限界に近づいており、両国はアメリカ・フランスの講和斡旋を受け入れた。八月、アメリカ大統領セオドア・ルーズベルトの勧告によりポーツマス講和会議が開かれ、九月に調印された。しかし日本は戦勝国であるにもかかわらず、ロシアへの賠償要求を放棄せざるをえなかったため、国民の不満は高まった。

無隣菴会議

京都市左京区の名刹である南禅寺のそばに、無隣菴という庭園がある。面積三千二百三十五平方メートル、東山を借景として疎水を引き込んだ池泉回遊式庭園だ。現在は京都市所有だが、もとは明治二十九年（一八九六）に完成した維新の元勲山県有朋の別荘だった。

無隣菴の中には、レンガ造りの洋館がある。その二階、江戸初期の豪華な花鳥図障壁面が飾られた和洋

折衷の二室で、明治三十六年四月二十一日、日本の運命を左右する「無隣菴会議」が開かれた。出席したのは山県その他、枢密院議長の伊藤博文、首相の桂太郎、外務大臣の小村寿太郎。山県と伊藤はすでに一線を退き、「元老」の地位にあったが、天皇とのパイプは強く、政界では絶大な権力を維持している。

無隣菴会議の主眼は、日増しに緊迫の度合いが高まる対ロシア対策についてであった。日清戦争で勝利した日本が、ロシアをはじめフランス・ドイツの圧力に屈し、遼東半島を清国に返還させられて以来、日本はロシアを危険視している。さらに、清国での義和団事件をきっかけに、ロシアが満州に勢力を拡大し、日本では危機感を募らせていた。このままロシアが東洋に進出を続ければ、近いうち日本にもその魔の手が迫ると考えたのだ。

会議の結果、次の三点が決まる。

第一に、ロシアが満州から撤退せぬ時は抗議する。

第二に、朝鮮においては日本の優越権をロシアに認めさせ、一步も譲らない。

第三に、日本はロシアの満州における優越権を認める。

それから両国の交渉が始まったが、満州をめぐる日本・ロシア双方の野望は、すでに妥協点を失っていた。

明治三十七年二月、御前会議では軍事行動に移ること、ロシアに対する国交断絶の最後通告文案が決まる。



会議が行われた無隣菴洋館



山県有朋 (明治35年)



伊藤博文 (明治36年)

そして日本海軍の仁川沖・旅順港のロシア艦隊奇襲により、日露戦争へと突入した。

さて、無隣菴会議のメンバーを見ると、小村を除いた三人が皆、現在の山口県萩市の出身であることにあらためて驚かされる。

萩の中でも山県は川島、桂は平安古の生まれ。伊藤の生まれは周防熊毛郡だが、少年の頃萩の松本村に移り住み、ここで成長した。

日本海に面した萩は言うまでもなく、萩藩（長州藩）毛利家の本拠地だ。意地の悪い見方をするなら、萩の町内会長の集りのような形で日本の運命が決められたのである。それぞれが有能な人物であるのは認めつつも、あまりにも偏った人選に映るのも否めない。

ところが矛盾するのだが、彼らにはつまらぬ地元意識などなかったというのが面白い。何度目かの総理となつて帰省した伊藤が、下関で演説をぶつた。その際、自分が総理になったからといって山口県を特別扱いする気はないと宣言し、聴衆の不評を買つたという話がある。そうした志を持っていたことは、特筆すべきであろう。

元老政治とは

幕府に代わり政権を握つた明治新政府は、維新の「勝者」である薩摩・長州・土佐・肥前藩の出身者で

大半が占められていた。

いわゆる「藩閥政治」だが、土佐と肥前は明治六年（一八七三）の政変前後に中央政局から消え、薩摩も十年の西南戦争で幾多の人材を失つた。

残つたのが長州である。以後は「長州の天下」と呼ばれた時代が明治の終わり頃まで続く。それは日本が近代国家へと脱皮した時期と重なる。

明治十八年に内閣制度が発足すると、長州閥内では山県有朋と伊藤博文が二大巨頭として覇を競う。二人はともに萩藩の下級武士出身で、松下村塾で吉田松陰の薫陶を受けた仲だ。

中国における「義和団事件」と「北進事変」が一段落した明治三十三年九月、第二次山県有朋内閣が辞職した。

政党嫌いの山県は、伊藤が立憲政友会を組織して、初代総裁に就いたのを面白く思っていなかった。そこで準備不十分なのを承知の上で、伊藤を後任に推したのだ。

伊藤はやむなく政友会を中心に、第四次伊藤博文内閣を組閣する。しかしスタート時から増税問題で揺れ、続く財政問題で分裂し、わずか七カ月あまりで辞職してしまつた。

ここに来て山県・伊藤は「元老」となり一線から退き、後輩に初めてバトンを渡す。純然たる世代交代ではない。元老たちは自分たちが適任と考える次世代の者を推薦し、その後見者として君臨するのだ。内閣は元老たちの承諾を得なければ、重大な決定も出来ない。天皇との強いパイプを持つ元老たちは、内閣



桂と曾根を教育した
藤田与次右衛門



桂 太郎 (総理大臣)



曾根荒助 (大蔵大臣)

に干渉する。

これが「元老政治」である。

こうして伊藤の次に内閣を組織したのは、山県直系で陸軍大臣だった桂太郎だ。

桂は弘化四年(一八四七)、萩藩士桂与一右衛門の長男として、萩城下平安古に生まれた(萩市川島に現存する桂太郎旧宅は後年のもの)。まともに維新の動乱を体験した山県・伊藤に続く二世代と思われがちだが、そうではない。山県との年齢差は九歳で、文久三年(一八六三)の攘夷戦争や明治元年の戊辰戦争に従っているから、ぎりぎり第一世代の最後尾に属している。

戊辰戦争で第四大隊三番司令として東北地方を転戦した桂は、その功により賞典禄三百五十石を下賜された。それを資金に明治三年、ドイツに留学して兵制を研究し、六年に帰国。七年陸軍歩兵大尉、八年から十年までドイツ駐在武官と、着実にその地位を高め、参謀本部で山県や大山巖(薩摩出身)を補佐して活躍して来た。

この第一次桂太郎内閣発足時のメンバーは、内務大臣に内海忠勝、大蔵大臣に曾根荒助(西湖)、陸軍大臣に児玉源太郎、書記官長に柴田家門と、ずらりと長州出身者が並ぶ。まさに「長州の天下」だ。

特に戦費調達に働いた曾根荒助などは、桂と同じ平安古の生まれだ。少年時代は共に近所の寺小屋で、藤田与次右衛門を師として読み書きを教わった仲である。言わば幼なじみ同士が片や総理、片や大蔵大臣の椅子に座ったのだ。

2. 萩で学んだ乃木希典

長府藩に生まれた乃木

日露戦争と聞けば、明治陸軍人の象徴とも言えるべき「乃木希典」を思い出す向きも多いだろう。

乃木は第三軍司令として二〇三高地の戦いを指揮し、六万人の死傷者を出しながらも旅順港を陥落させた。この功により陸軍大将に進んだが、明治天皇に殉じて大正元年（一九一二年）九月十三日、東京赤坂の自宅で静子夫人と共に自決した。享年六十四。

没後、乃木は「軍神」として祭り上げられ、東京・長府・那須・伏見・函館・善通寺（順不同）というゆかりの地に、乃木神社の建立が相次いだ。

乃木がこれほどまでに人々に強烈な印象を与えたのは、古武士のような殉死という死に様があったからだ。多くの国民は数十年前に失なわれたはずの「武士道」という美学に酔いしれた。文明開化により入り込んだ、欧米の合理主義の中で育った者たちにとっては、かえって新鮮だったのかも知れない。乃木の強靱な精神力、滅私奉公に徹した言動が、多くの日本人に忘れていたものを思い出させたのだ。

そんな乃木の人格形成に大きな影響を及ぼしたと考えられるのは萩で受けた教育であり、吉田松陰の遺

ちなみに曾根も戊辰戦争に従軍し、明治三年に大阪兵学寮入学。五年から約五年フランスに留學した。帰国後は陸軍省に出仕し、二十三年には衆議院書記官長となる。また二十六年には駐仏公使となって条約改正に当たり、帰国後は司法（第三次伊藤内閣）・農商務（第一次山県内閣）の大任を歴任していた。そして日本はこの第一次桂内閣の明治三十七年二月にロシアとの戦いに突入してゆくのであった。

訓の数々であった。

実は乃木は、十六から二十一歳までという最も多感な時期を、萩で学んでいる。

乃木は現在の山口県下関市に本拠を置く長府藩の出身だ。長府藩は萩藩の支藩のひとつで、毛利秀元（元就の孫）を藩祖とし、石高は五万石である。

乃木は嘉永二年（一八四九）十一月、長府藩士乃木十郎希次の第三子として江戸麻布の長府藩邸に生まれた。乃木が十一歳の時、父が藩主に諫言して減祿閉門となり、このため一家は長府に移り住んだ。こうして乃木は、藩学の集童場で学ぶ。

幕末になると萩藩では人材育成の気運がますます高まり、支藩は優秀な若者を萩の本藩に留学させるようになる。

長府藩でも集童場で学ぶ少年の中から井上次郎・滝川申芸・乃木無人（乃木の幼名）の三人を投票で選り、萩に留学させようとした。だが、この計画はどういうわけか中止となってしまった。

そこで乃木は父に萩行きを懇請したが、父は許さなかった。家計が苦しいことを知っていた乃木は、それ以上言い出せなかったという。

それでも乃木は、萩留学をあきらめなかった。十六歳の乃木文蔵（乃木の元服後の名）は元治元年（一八六四）三月、家出をして長府から数十キロメートルの道のりを萩へと急いだのである。

乃木をそこまで駆り立てたのは、亡き吉田松陰に対する思いであった。

幕府の開国政策を激しく批判した松陰が、安政の大獄で処刑されてからすでに四年半。尊王攘夷論が高まるとともに防長二州の若者たちの間で、松陰は神格化されていた。

「身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂」

の辞世とおり、松陰の志は彼が主宰した松下村塾の塾生を始め次代へと確かに受け継がれていたのだ。

身体が弱く、学問で身を立ようと考えていた乃木もまた松陰を崇拜し、その教えを学びたいと願っていた一人だったのだ。

乃木と玉木文之進

乃木が訪ねたのは、萩の松本村に住む玉木文之進だった。

玉木は松陰の叔父（松陰の実父の弟）であり、学問の師でもある。玉木は幼少期の松陰に、武士とは何であるかを徹底したスパルタ教育でたたき込んだ。十一歳で藩主に進講した松陰が、その師匠の名を尋ねられ、

「玉木文之進で御座りまする！」
と答えたという逸話もある。

乃木はあきらめて再び長府への道を歩きたそうとしたが、玉木の妻辰子に引き留められ、その夜は玉木家の一室に泊まった。

それから乃木は辰子の斡旋もあり、「百姓」として玉木家で朝から夕まで働くことになる。

玉木は乃木を厳しく指導し、田の草取り、草刈り、施肥にいたるまで容赦なく命じた。夜は米つきもさせられた。そして米つきの後には辰子から、文学に関する書物を読む指導を受けることもあった。

ひとつの「美談」が伝えられている。萩での生活が十九月ほど続き、あと数日で慶応元年（一八六五）の正月が来るというある日、乃木は玉木に呼ばれた。

行ってみると玉木は上機嫌で、乃木に正月を祝うため帰省せよと勧める。玉木は乃木の父に、謝罪して

それに乃木家と玉木家は、親戚関係にあった。乃木の何代か前に枝分かれをして、玉木と名乗ったのが、玉木文之進の先祖だ。以前から知らぬ間柄ではない。

ところが玉木は、はるばる訪ねて来た乃木を叱り飛ばした。

身体が弱いから、学問で身を立てようという考えがけしからぬ、なぜ身体を鍛えて強健にせぬのか、武事で身を立てるのが嫌なら百姓になれ—玉木は乃木の甘い考えを激しく非難した。

乃木はさらにその心事を述べようとしたが、玉木は、

「莫迦^{ばか}！ 卿^{きみ}のやうなものには、これ以上に何も申聞ける必要がない。帰りをれ！ 我^{わが}侯^{こう}者が！」と大喝した。



日露戦争当時の乃木希典



乃木が学んだ玉木文之進旧宅（萩市椿東）

くれたのだという。さらに辰子は乃木の父が預けたという学資の余りが入った封書を、乃木に手渡した。乃木は父母の至情を察して涙を落とした。

長府に帰ると、乃木の両親は久しぶりに見るわが子の逞しく成長した姿を喜んだのは言うまでもない。

明倫館に入学

こうして正月を長府で過ごした乃木は、再び玉木のもとに帰った。今度は両親の許しをえたため、乃木は農作業の合間や夜に、玉木から経書や歴史を学ぶことが出来た。念願となった乃木は松陰の遺著はもろろん、水戸学の諸書を写して学んだ。玉木は乃木の中に松陰の面影を見、松陰に託して果たせなかった夢を果たそうとしたのだろう。

ある時、玉木は松陰自筆の「士規七則」を乃木に与えた。これは松陰が玉木の長男彦介の元服にあたり、武士の心得を七カ条に分けて記したものである。

「凡そ生れて人ならば、宜しく人の禽獸（けいじゆう）に異なる所以を知るべし」

「君臣父子を最も大なりと為す。故に人の人たる所以は忠孝を本と為す」

「凡そ皇国に生まれては、宜しく吾が宇内に尊き所以を知るべし」

「志を立てて以て万事の源と為す」

等々。それから乃木はこの「士規七則」を肌身離さず大切に所持したが、後年西南戦争の最中に失ってしまったという。さらに長府の父は、乃木のため山鹿素行著『中朝事実』と吉田松陰著『武教全書』を丁寧に書き写して、送り届けてくれた。感激性の乃木は発奮し、なお一層学問に励んだ。

そうした努力が実り、慶応元年（一八六五）九月、乃木は藩校明倫館（めいりんかん）に入学が許された。

明倫館は享保四年（一七一九）藩主毛利吉元の時代に堀内（三ノ丸）に開かれた萩藩の最高学府だ。全国に約二百あった藩校中、十二番目に設けられたという古い歴史を持つ。さらに幕末の嘉永二年（一八四九）、毛利敬親の代になって城下江向に移転、拡張される。ペリー来航四年前という緊迫した時世も反映して、教育内容は学問同様に武道にも重点が置かれた。しかも文久三年（一八六三）からは松陰の遺著を、教科書として使っていた。

明倫館には兵学寮・文学寮があり、寄宿する居寮生と、通学する入舎生がいた。乃木は最初、文学寮の入舎生として玉木家から通い、のちに居寮生となった。玉木もまた都講として出仕し、後進の指導にあたりつづけていた。

乃木が文学寮を選んだのは、最初からの志どおり学問に対する情熱が強く、やみがないものがあり、それを玉木も認めたからだろう。維新後、軍人になってからも流麗な戦況報告書を著したり漢詩を作ったりと、乃木はつねに文人としての才能をちらつかせている。時代の流れが強引に、乃木に武の道を選ばせたような気がしてならない。さらに十一月から乃木は来栖又助に入門し、一刀流の剣を学んでいる。午後、

明倫館の講義が終わると、剣道の稽古に汗を流し、明治元年（一八六八）一月には一刀流の目録を授けられた。

動乱の中で

乃木が萩で学んだ元治元年（一八六四）から慶応元年にかけては、萩藩にとって未曾有の国難の時期、高杉晋作の言を借りれば「存亡危急の秋」であった。

元治元年七月には前年八月の政変で失脚した萩藩が軍勢を率いて京都に上り、「禁門の変」を起こすも敗走した。さらに八月には、英米仏蘭の四カ国連合艦隊十七隻が関門海峡に襲来し、下関（馬関）に砲撃を加えた。

朝廷は幕府に長州征伐を命じ、萩藩に征長軍が迫る。萩藩政府は「俗論派」が台頭して実権を握り、征長軍に対しひたすら恭順謝罪して難局を乗り切った。

ところがこれを不服とする高杉晋作ら「正義派」諸隊が十二月から翌慶応元年一月にかけて挙兵し、内戦を経て政権を奪取する。こうして萩藩は、表面では幕府に対して恭順し、裏では着々と実力を蓄えるという、いわゆる武備恭順路線で統一されてゆく。一方、萩藩の不穏な動きを察知した幕府側も、再度の長州征伐実現のための準備に入った。

乃木は、これらの数々の事件に直接関わることはなかった。しかし当然ながら、その周囲には動乱の時代が影を落とす。

慶応元年一月二十一日、玉木の長男で御桶隊斥候の玉木彦介が、内戦に参加して二十五歳の生命を散らせる。嫡子を失った玉木は、乃木の弟で十二歳になる真人を養子として迎えたいと希望し、実現した。これは乃木の人間性にひかれた玉木夫婦が、彼が育った家庭に絶大な信頼を寄せたからだ。こうして玉木家が乃木の兄弟は同居することになった。

のち真人は、不平士族の反乱「萩の乱」に参加し明治九年十月、二十四歳で戦死することになる。そして真人が反乱に加わった責任をとり、玉木も先祖の墓前で自決するという凄絶な最期を遂げる。

やがて幕長間で行われていた交渉の雲行きが怪しくなり、慶応二年四月、乃木はみずから願い出て、筆を投げ捨てて長府へ帰った。この決意を玉木も喜び、激励して送り出したという。

こうして乃木は長府藩の軍隊である報国隊に加わり、同年六月から始まる第二次幕長戦争（四境戦争）では高杉晋作の指揮下、小倉方面で戦った。その際、名を文蔵から源三へと改めている。この時乃木は戦場で、左足に銃丸によるかすり傷を負った。

戦いは各地で長州軍が征長軍を撃破し、九月には休戦協約が締結された。さらに翌三年一月、幕府は征長軍の解散を命じる。事実上、戦いは萩藩の勝利に終わった。

と同時に乃木にも萩に帰って学問を続けるよう命が下ったため、明倫館の文学寮に復帰した。戦場での

3. 田中義一と日露戦争

ロシアへ軍事情勢探索

萩旧城下町のメインストリートである御成り道を通り堀内に入ると、正面の公園中央に田中義一銅像がそびえる。昭和七年（一九三二）三月に萩大正会の発起により創建されたが、十九年に金属供出で失われ、現在ののは三十八年二月に再建された二代目である。長州出身の五人目の総理大臣であり陸軍大将でもあった田中義一は、「おらが大将」のあだ名で地元において親しまれた。そして義一の生涯にとっても、日露戦争は大きな位置を占めるものであった。

元治元年（一八六四）六月二十日、萩城南片河町に住む下級武士の家に生まれた田中義一は、陸軍軍人を志し明治十六年（一八八三）十一月、陸軍士官学校に入学した。十九年六月、陸軍歩兵少尉・第一連隊小隊長。二十二年十二月、陸軍大学校入学（二十五年十二月卒業。二十七年に始まる日清戦争では陸軍歩兵大尉となり第一師団参謀を務め、太平山・営口の戦いに参加して凱旋した）。

その後、参謀本部員となっていた義一は、三十一年五月になりロシア派遣を命ぜられる。日清戦争後の三國干渉で、日本国民がロシアに対する敵意が高まったころだ。軍事情勢探索などが義一に課せられた主

経験を積んで視野を広げた乃木は、さらに猛勉強に励んだ。ところが学友たちと講堂で相撲をとった際、左足を挫いてしまう。

翌明治元年（慶応四年・一八六八）七月、乃木は明倫館を退学した。その理由は、玉木が藩政に参予して多忙になり、都議が出来なくなったからだとも、明倫館が山口に移るためだとも、あるいは左足の捻挫が悪化したためだとも言われる。こうして乃木の萩留學は終わった。

時は流れて明治十二年末、弟集作が松下村塾に遊學する際、乃木は次のような漢詩を寄せている。

家弟松下村塾に在るに寄す

刻苦悲酸鬼神も感ず。危寧を履んで復吾身を顧りみ。請う看よ烈士功臣の迹。出でざれば尋常飽綬の人愛弟を激励すると共に、亡き玉木のもとで学んだころを追懐しているのだ。

本章は宿利重一「増補 乃木希典（昭和十二年）によった。

明治三十七年二月に日露戦争が始まると、田中義一少佐は大本営参謀となった。さらに戦況が発展して満州軍が編成されると、義一は作戰主任参謀となり、児玉源太郎参謀長の右腕となって活躍。遼陽・沙河・奉天の会戦に作戦を展開し、日本軍を勝利に導いた。特に、大本営が最後まで北辺警備に当たらせていた第八師団を南部満州に野戦軍として投じ、沙河会戦を勝利に導いたのは、義一の意見によるものであり、卓見であるとの評価を得た。

また義一は、ロシア滞在時代の親友ミハイロウィッチ・クリンゲンベルグ少佐と戦場で再会するという逸話も残している。

友と再会

三十二年八月六日、ロシアのペテルスブルグに到着した義一は、ロシア人に同化するため「ギイチ、ノブスキーウイチ、タナカ」と名乗った。さらに三十三年六月、アレキサンダー三世歩兵第百四十五連隊の隊付将校として入隊を許され、軍隊内で実習を行い、また多くの知己を得た。

三十五年六月に帰朝するまでロシアで生活した義一の体験が、やがて勃発する日露戦争の有意義な情報になったのは言うまでもない。



田中義一銅像(萩市堀内)



少尉時代の田中義一



田中義一の陸軍大将服
(萩市蔵)

クリンゲンベログはロシア滞在時代、公私共に義一の世話をしてくれた男だ。義一が帰国する際、クリンゲンベログは銀製のウォッカコップを、義一は所持していた日本刀（備前長船祐定作）をそれぞれ贈り、記念とした。コップには南露コーカサス地方の古城の図と共に「飲めよ、そして忘れるな、親友よ」と刻まれていた。そして二人はそれぞれの記念品を携え、日露戦争に従軍していた。

沙河の会戦中、最も激烈を極めたのは三塊石山の戦闘だ。その際、負傷のため取り残されたロシア軍の連隊長が「ギイチ、ノブスキーウイチ、タナカ」と叫びながら、日本刀を振り回していた。この連隊長は第十師団司令部に捕虜として収容されたが、義一が確かめるとクリンゲンベログであった。クリンゲンベログは中佐に昇進し、連隊長代理として三塊石山の守備に当たっていたのだ。

義一が病院に見舞いに訪れると、クリンゲンベログは負傷の痛みを忘れたかのごとく「ギイチ、ノブスキーウイチ、タナカ」と叫び、その手を握り締め、感激の涙を流した。さらにクリンゲンベログは、「露軍がかくも惨敗を喫しようとは、夢想だもしなかったことである」

と興奮しながら述べるので、義一も深く同情して慰めたという。その後、クリンゲンベログは四国松山の捕虜収容所に送られた。依頼があると義一の妻が代わって不自由のないよう、絶えず慰問品を送った。

クリンゲンベログが松山などから義一やその夫人に送った数通の手紙が『田中義一伝記』上巻（昭和三十三年）に収められている。そこには、友情に感謝する言葉が並び、もし義一が同じく捕虜になった時は、

自分が義一のために奔走すると書かれている。あるいは一日も早い戦争終結を願う気持ち、望郷の念も切々と綴られ、読む者の胸を熱くする。武士道と騎士道が生きていたのだ。

義一はその後も軍務局長・参謀次長・フィリップピン総督・陸軍大臣・総理大臣などを務め、山県没後の長州閥を代表する軍人政治家として活躍。また田中外交と呼ばれる対中国積極方針をとり、三次にわたる山東出兵を断行した。昭和三年には普選第一回総選挙を施行し、即位御大典に奉仕するも、張作霖爆殺事件をめぐる内閣総辞職を余儀なくされ、四年九月二十九日病没、六十六歳だった。墓は東京都多磨霊園にある。

4. 見島とロシア兵

見島に海軍望楼を設置

萩市に見島^{みしま}という、日本海に浮かぶ離島がある。面積七・八平方キロメートル、人口約一千二百人。萩港から北へ約四十五キロの沖合で、高速船に乗ると一時間十分ほどで到着する。

島の南端にあたる本村港^{ほんむら}から陸に上がると、和牛のルーツとして注目される見島牛（天然記念物）が、山の斜面に開かれた放牧場をのっしりと歩くのが見える。半農半漁の島は時間がゆったりと流れている感だ。維新の際「明治」と改元されたという情報が一年たっても届かなかったという話があるのも頷けよう。

それでも激しい時代の波は当然押し寄せたわけで、二十八人が見島から日露戦争に従軍したとの記録がある。

また、海上交通の要所にあたることから、島には望楼と呼ばれる物見櫓が海軍により設置されることになった。その経緯は、山校郷土史研究会発行の『研究報告書「台覧記念号」』（昭和二年）に紹介されている。以下、同書をもとに書き進めることにしよう。

明治三十七年七月二十三日午後一時、汽船一隻が見島南端の本村港沖合に碇泊した。日露開戦からすでに半年。島民たちはロシア艦隊がいつ襲って来るかも知れないという危機感を抱き暮らしていたから、先を争って宮崎山に登り、山頂から様子を見ることがあった。

やがて一隻のボートが港口めがけて進んで来た。船号を見れば確かに日本船だ。それでもロシア兵が乗っているかも知れぬと、島民たちは用心深く観察を続ける。

着岸、上陸して来たのは舞鶴鎮守府参謀長の高島海軍中佐とその随行員、および水兵だった。一行は村役場に赴き、厚東郡書記長・長谷川房次郎村長の先導で雨の中、山地に向かう。彼らは望楼の建設地を選定するため、見島に来たのである。

視察を終えた参謀長は同日午後六時、乗って来た御用船白川丸で引き上げていった。随行員では舞鶴経理部の武藤技手だけが見島に残った。

こうして望楼は見島の北端、神畑（標高二三三メートル）に建設されることとなった。同月三十一日から白川丸が建築資材を運んで来、ほどなく竣工を見た。しかし、翌三十八年に戦争が終わると廃止されたという。

見島に轟いた砲声

見島には本村港の他、島中央から北の東沿岸に宇津港という高速船が立ち寄る港がある。その近くの岬上には、地元の信仰があつい観音堂が建つ。参道には鳥居が並び、江戸以前の神仏習合の形が残っているのが珍しい。明治元年三月の神仏判然令も、この島には届かなかつたのだろうか。

観音堂の傍らには、砲弾が置かれている（写真裏表紙）。高さ五十センチほどの椎の実型で、永年風雨に晒され続けたせいも、全体が錆に覆われている。

先日、この砲弾を萩博物館で展示するため借りて来た。一人で持ち運び出来るかと思いきや、とんでもない。おそらく重量は百キログラムを越えているだろう。萩港に到着した錆だらけの砲弾は、大の男三人に抱えられ、ようやく迎えの車に運び込まれた。

この砲弾は、いつの頃か見島の漁師が底引き網に引っかけ、持ち帰ったものだという。以前はもうひとつ、少し小さい砲弾も観音堂に置かれていた。しかしこちらは信管が抜かれておらず危険であるため、平成十六年になって処分され、いまは見る事ができない。いずれも地元では、「日本海海戦」で使用された砲弾と伝えられている。

日露戦争中、最大の海戦である日本海海戦は、明治三十八年（一九〇五）五月二十七日から二十八日にかけて対馬海峡で行われた。

司令長官東郷平八郎が率いる日本の連合艦隊は、
「皇国の興廢この一戦にあり。各員一層奮勵努力せよ」

との決意のもと、ウラジオストクに向かうロシアのバルチック艦隊に壊滅的打撃を与えた。

ロシア側の損害は捕虜が司令長官以下六千六百六名、戦死約五千名、三十八隻のうちウラジオストクに逃れたのは巡洋艦一隻と駆逐艦二隻だけだった。

この戦いの結果、ロシアは講和会議を受け入れ、戦争は終結へと向かう。

萩をはじめ日本海沿岸の町や村には、五月二十七日午後二時から、遠雷のように日本海海戦の砲声や響いて来たという話が残っている。もちろん見島にもだ。その間じゆう、民家の障子がガタガタと音を立て、揺れ続けた。あれだけの砲弾が飛び交ったのだ。さぞ、凄まじいものがあっただろう。

しかも現代のように、正確な情報が即座に伝わって来るわけではない。住民たちは色めき立ち、恐怖におののいた。

見島の島民たちの中には臨戦地域になったと、覚悟を固めた者がいた。

あるいは動揺して村役場に押しかけ、何事が起こっているのかを問うた者もいた。

またあるいは学校に押しかけて、日ごろ物知りと尊敬されている教員に問う者もいた。

ちょうど小学校では五時目の授業が終わろうとしていた。教師らは狼狽する子供たちに心配するなど論じた。

やがて望楼から長谷川村長に、対馬海峡で海戦が行われている旨通報があった。使者は宇津の青年長富某である。村長はただちにこれを村民に知らせ、さらに何らかの沙汰があるまで軽率妄動せぬよう伝えた。しかし砲声は刻々と激しさを増し、島民の中には半を隠す者や、鍋釜を携えて山中に逃げる者などがいたという。ようやく砲声が聞こえなくなったのは夜九時半ころで、ここに来て騒ぎも一段落着いた。

見島に漂着したロシア兵

砲声が鳴り響き、見島の島民が恐怖におののいたのが明治三十八年（一九〇五）五月二十七日のこと。翌二十八日はうって変わり天候は快晴、海波穏やかであった。

日本海軍の勝利を信じる島民たちは、一刻も早く戦況を聞きたいと待ち構えていた。村役場でも早朝から長谷川村長以下役場の職員が参集し、善後策を討議する。そして厚東郡書記・多田訓導・黒瀬巡查が戦況聞き取りのため午前八時、望楼に派遣されることになった。

ところがこの一行が望楼に着いたか、着かないころ、宇津の中村栄吉という老人が息を切らせながら村役場に飛び込んで来る。栄吉は、

「ロシア海兵の襲来」と、知らせた。

村長以下の驚きは一方ならず、どうしたものかと協議しているうちに、第一の使者が現れた。この使者は、望楼に向かった郡書記からの通信をもたらしした。

「露国海兵約六十名（負傷者十名）上陸す。至急医師の派遣ありたし」

黒瀬巡查は手帳をちぎった紙片に、このように鉛筆で走り書きしていた。

実は、望楼に向かった郡書記の一行だったが、宇津に着くと村民たちが、

「ロシアが来た。ロシアが来た」

と大騒ぎをしている。荷物を背負って逃げ惑う者もいる。

そこで一行は実情を確認するため、望楼行きを中止して五軒屋通を進んだ。途中、敵船を見たという村民の話聞き、その場所を確認しながら海岸に出てみると、たしかに一隻のボートが沖に浮いていた。

襲撃か、漂着か、ともかく分からない。浜に集まった島民たちが大騒ぎをして、

「上陸させるな」

「殺せ」

といった罵声が飛び交う。

そこで現場に居合わせた望楼の一水兵が、試しにボートに銃を向けた。するとロシア兵の一人が白いハシカチーフをしきりと振ったから、戦意は無いと判断。本村港に回航させようとしたが意思が通じなかったようで、宇津の砂見田（沙弥田）海岸に上陸したというわけである。

(丁酉四月廿八日)

(角其) 影の証に子孫明や子孫

丁酉	四月	廿八日	晴	晴	晴
<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> 皇 皇 皇 皇 皇 皇 </div>					
<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> 御 御 御 御 御 御 </div>					
<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> 辰 辰 辰 辰 辰 辰 </div>					
<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> 下 下 下 下 下 下 </div>					
<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> 后 后 后 后 后 后 </div>					

(角其) 浮着到山松砲發守九砲福軍露

早朝夜舟出帆... 改定... 北... 早朝夜舟出帆... 改定... 北... 早朝夜舟出帆... 改定... 北...



見島地図



見島の「露兵漂着地」の碑



ロシア兵が漂着した見島の砂見田海岸

いま、ロシア兵が漂着した見島の砂見田海岸には、砲弾型の「露兵漂着地」と刻むささやかな石碑が建つ。裏には「明治三十八年五月二十八日」と、漂着の日が刻まれている。その他は、誰がいつ建てたのか、何の銘記もない。

ボートに乗っていたのは、海戦で敗れた特務艦カムチャツカのロシア兵五十五人、うち十人は重傷者だった。中には左肺貫通の者もいた。島の女たちは、その痛々しい姿を見て思わず涙した。巡査の知らせを受けた村長は、まずロシア兵が攻撃目的で上陸したのではないと知り、胸を撫で下ろした。そして直ちに医師の有田暢介と長松文恭を従え、砂見田海岸へと急行した。

砂見田海岸は宇津港と観音堂のある岬のちよと中間、湾のような地形になっていて、砂浜が広がっている。いまは沖に防波堤などが築かれ、多少霽開気は当時と異なるようだが、夏になると海水浴客で賑わう美しい海岸だ。

島民が握り飯を与えようとしたが、ロシア兵たちは最初疑ってなかなか手に取ろうとはしなかった。それでも村役場の役人たちが食べて見せ、毒が入っていないのが分かると、口に運んだ。あるいは村助役などが「ミルク、ミルク」と重湯をすすめたり、沢庵漬を「ニッポン、バター」と配ったりといった逸話も伝わる。

その日午後三時ころ、角島（下関市豊北町）から水雷艇二隻（福寿号と第二十五号）がロシア兵を迎えに来た。これに対しロシア兵は砂浜で起立、敬礼して実に見事な態度だったというのが、島民たちの間で後々まで語り草になった。お互いの心の中に「敵」に対する理解、敬意が生まれたようだ。

こうして捕虜になったロシア兵は、北九州門司の収容所に送られて行った。その途中で、重傷者の一人が亡くなったという。

5. 須佐とロシア兵

須佐にもロシア兵が漂着

このたびの平成の大合併で萩市となった日本海に面する須佐（もと阿武郡須佐町）にも、ロシア兵漂着の史実が伝わる。

日本海海戦が始まった明治三十八年（一九〇五）五月二十七日午前十一時ころから、遠く西方海上より遠雷のような砲声が、須佐に聞こえ始めた。地響きや家の振動で窓ガラスが割れる家もあったという。

翌二十八日正午、見高望楼から、撃沈されたカムチャッカ号の乗組員五十五名が見島に上陸して目下救護中であるとの電報が須佐に届き、緊張が一気に高まった。

こうした中、夜九時ころになり、須佐から鳥賊漁に出ていた青木音櫃ねぐらが急ぎ帰り、

「今小島沖に出ていたところ妙な船が一隻沖合いから来て、ヒーヒーと物を言うけれど言葉は通じず、自分の舟を追いかけて来るのでこれ知らせるため帰って来た、これはロシア兵が攻めてきたのではないかと訴えた。そこでただちに船三隻で捜査したところ、ロシアの敗残兵であると確認したため、包圍、誘導して須佐港に帰った。後で分かったのだが、闇夜で勝手が分からぬため、青木に案内を乞って追いかけて

たらしい。

彼らはロシアの巡洋艦オーローラ号（七八六〇トン）に乗っていた三十三人だった。当日はたまたまイワシの大漁で浜辺は賑わっていたから、村民もロシア兵も大いに驚いたようだ。

「何、敵兵か、上陸はさせるな、皆殺しにしまえ」

「おのれ我が子の仇、生かしておかれるのか」

騒さわぐ群衆を村長と伊藤松五郎巡査が制し、ロシア兵は本浦から上陸した。

それから身体検査が行われたが、洋刀一振り以外は銃器のたぐいは所持していなかった。ただ、ロシア皇帝（キリスト教管長）の肖像が入った風呂敷包みは、どうしても手放そうとしないので、これはそのままとした。一同はこの肖像を先頭に、収容所に決まった近くの法隆寺に入った。

そして手厚い看護がほどこされ、同月三十日午前十一時、鴻城丸で迎えに来た係員に連れられ、北九州・門司の収容所に送られて行った。

出発に際し、ロシア兵たちは記念に双眼鏡一個を残した（この双眼鏡は役場で保存されたが、いつの頃からか失われたという）。そして人影が見えなくなるまで帽子や手を振り、港を出て行ったのである。

郡長あての報告書は次のとおり。

「一、五月二十八日午後九時、ボート一隻が須佐港内に漂着につき、直ちに出航して取り調べたところ、露国海軍兵なること分明せり、取りあえず上陸せしめ法隆寺に収容す。



ロシア兵が収容された法隆寺
ただし建物は後年のもの（萩市須佐）



法隆寺の「日本海戦役漂着
敵艦将卒収容地記念碑」

※写真提供=中尾明日美氏

一、漂着人員は左の如し

露国軍艦ウオーロラ号乗組

副艦長 アルトチューフ 四十三才

機関士 ドブアントスキー 三十才 下士六名 兵卒二十五名

計 三十三名

右兵卒の内一等水兵、カエランドスキーなるもの英語に通ずるを以て救護上大いに便利を得たり。右軍艦は五月二十七日の戦闘に撃沈せられたる由。

一、五月三十日午前十一時、露兵は小廻船に乗せ、ボートと共に下関水上警察署鴻城丸引航し下関へ向
け出発す。」

ロシア兵の手紙

東シナ海の東方海域を北流し、九州西岸から日本海に流れ込む対馬暖流に乗ったため、ロシア兵は見島や須佐に漂着した。それにしても日露戦争のさ中に、日本の一般市民がこのような形でロシア人と接触したというのは、「国際交流」として特筆すべき史実ではないかと思われる。

須佐の法隆寺に収容されたロシア兵が三歳の子供を抱き上げてはお擦りをし、涙を流したという逸話が

伝わる。故国の子供を思い出したらしい。子供は大谷次郎吉の件、倫一だったという。これを見た人々は、どこの国であっても人情に変わりはないと、同情を禁じ得なかった。炊き出しでむすびを与えると、ロシア兵は最初妙な面持ちをして食べなかった。しかし試食して見せると、食べるようになった。ついには自分たちが持っていた黒パンは食べず、むすびの方を好むようになった。

あるいはロシア兵に副食として魚の干物を出したが、手をつけない。刺身を出しても、食べようとしな。しかし「チャ、チャ」と飲む真似をして要求するから、茶を出すと、よほど気に入ったのか何度も要求して来た。そこで好奇心から上茶を出したら、いっそう満悦のようすであったという。

またあるいは、ロシア兵の中に「二等水兵のカエランドスキーがいた。ある時、カエランドスキーは「通の封書を差し出して、これを本国に送って欲しいと言う。

「どのような秘密を通報するか知れない」

「いや、個人の信書を無断で開封するのは道徳上、よろしくない」

評議の結果、この手紙は山口県庁を通じてそのままロシアに発送された。

後日、県庁からの報告で手紙の内容が分かった。それはロシアで通信事務を扱うカエランドスキーの兄にあてたもので、

「我らは今日本の山陰の一孤島に上陸し無事である。これまで日本は野蛮国と聞いていたが、我らの今居

る一小地区でさえよほど文化の程度がすんでおり、総じて公徳心に富み、親切に扱われている。悪宣伝の誤解を解くよう、機関誌に報道を頼む」

とあったという（以上は『須佐町誌』〈平成五年〉を参考にした）。

宿舎の法隆寺には明治四十五年（大正元年 二月になり「日本海戦役漂着敵艦将卒収容地記念碑」（長州萩出身の海軍中将有地品之允書）が建立された。実はこれについては忠魂碑の方が先だとの意見もあったのだが、久原房之助（須佐出身の大実業家）の兄斎藤幾太の出資により出来たものである。碑の裏面には次のように刻まれている。

「 従五位男爵 益田精祥撰

日本海海戦殲滅露国艦隊、其敗残之将卒三十三人漂着、此実明治三十八年五月廿八日也、村人収容之於法隆寺、給衣食与医薬撫恤、三日以致于我海軍後和成俘皆還、特致書謝恩尽感我義也、因建碑告事蹟于来者云爾

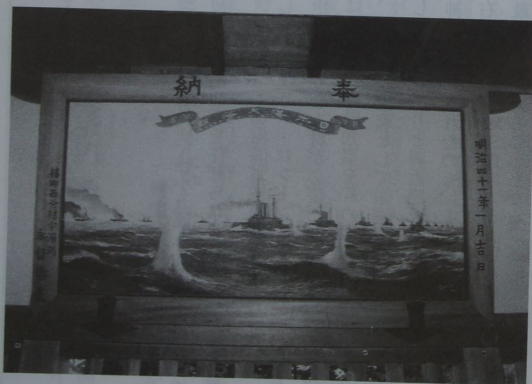
明治四十五年二月

正八位勳八等 益田潜書

（なお小松津代志『対馬のこころ』〈平成十七年〉によれば、須佐に漂着したロシア兵は戦艦スワロフおよび巡洋艦ウラルの乗組員となっており、本稿では『須佐町誌』に従いオーロラにした）



ロシア兵が埋葬された越ヶ浜嫁泣湾（萩市）



椿八幡宮に奉納された日本海海戦絵馬（萩市）

越ヶ浜に埋葬されたロシア兵

明治三十八年（一九〇五）五月二十九日午後四時ころ、見島十五里の沖合で板片に取り付き漂流中だったカムチャッカ艦の八人が、萩・越ヶ浜の漁民に救助された。残念ながらこの八人のロシア兵は全員が亡くなり、遺骸は越ヶ浜の嫁泣湾に埋められる。

戦後ロシア側が引き取りに来たので掘り起こし、跡地には目印の石が置かれたという。あるいは以前はその墓が、現在の田中ホテルの敷地にあったという話も残る。

その他、下関市豊北町阿川浦に漂着したロシア兵二名の遺骸を村民が共同墓地に埋葬し、碑を建てている。漁師は一般的に信仰心があつく、漁中に仏（遺骸）を拾うと大漁になるという伝承もあって、大切にされているのだという。

こうした例は他にもまだまだ存在するようだ。誇らしげに語り継がれる話もあれば、風化寸前の話もある。今後も調査して歩くのが楽しみだし、意義を感じている。

そして、つねに感じるのは、敵兵といえども祖国のために健闘した者に対し、あつい敬意を払うことが出来た当時の人々の純粹さだ。国際間の「正義」対「正義」は、相手を認める努力なしには解決しない。超大国の「正義」を押し通すばかりでは、泥沼化する一方だ。我々はこの百年間のどこかで、大切な何かを失ったのかも知れない。

6. 講和締結とその後

倒された伊藤銅像

長州藩の下級武士だった伊藤博文は、吉田松陰に師事し、高杉晋作や桂小五郎らと討幕運動に奔走した。そして明治元年（一八六八）五月には大抜擢され、初代兵庫県知事を任せられる。また、二十八歳という若さだった。

伊藤は幕末の一時期、長州藩秘密留学生の一人として、イギリス・ロンドンで学んだ経歴の持ち主である。国際貿易港として開港したばかりの神戸には、伊藤のような人材が必要だったのだ。ただし伊藤は廃藩置県を提唱したため反発を受け、明治二年四月には早くも兵庫県知事を辞めている。

以後中央に出て、初代内閣総理大臣を務めるなど、伊藤は政治家として栄達を究めた。よって、神戸市民は伊藤に対し、自分の村から巣立った青年が出世したような誇りと親近感を持ち続けている。

明治三十七年、存命中の伊藤の銅像が神戸・湊川神社に建立されたのも、そのためだ。銅像の伊藤はフロックコートの前を開け、左手に憲法草案を携え、右手を腰に置いてポーズを決める。

ところがこの伊藤銅像は、間もなく思いがけぬ「最期」を迎えることとなる。

日露戦争は明治三十八年九月五日、アメリカ・ポーツマス軍港で調印された「ポーツマス条約」により終結を見た。しかし日本は戦勝国だったにもかかわらず、賠償要求を放棄するなどの譲歩も必要だった。日本国民は裏切られたと憤り、納得しなかった。弱腰外交の「元凶」として元老の伊藤博文や、講和全

権大使の小村寿太郎が槍玉に揚がった。

伊藤は腹心の金子堅太郎を使い、日露双方の兵力が限界に達した地点でアメリカ大統領ローズヴェルトが講和斡旋に乗り出すよう、早くから根回しをしていたのだ。

東京では講和に反対する民衆が警官と衝突し、交番が焼かれるという、いわゆる「日比谷焼き打ち事件」が起こった。

神戸でも同月七日夜、湊川神社前の大黒座で、河野広中らによる講和反対の演説会が行われた。集まった一千数百人はその足で湊川神社に殺到し、伊藤銅像に鎖をかけて引き倒した。それから銅像を金槌で叩き、口々に罵りながら福原遊郭を引き回したあげく、海に捨てようとした。

暴徒と化した民衆に、警察も手の施しようがない。それでも海岸近くで銅像を奪い返し、ひそかに船で灘の服部二三（山口県出身）県知事別邸に運び込み隠した。

銅像は昭和五年（一九三〇）になって秋・松本村の伊藤旧宅に運ばれ、再建された。台座の裏面には、「故兵庫県知事服部二三氏ノ遺志ニ依リ、其ノ遺族之ヲ秋町ニ寄贈シ、阪神及秋町有志者斡旋シテ資ヲ募リ、之ヲ公ノ旧邸ノ側ニ建ツ」

萩城下平安古出身の軍人政治家である桂太郎に、実業家の桂二郎という実弟がいたのはあまり知られていない。

大正六年（一九一七）に故桂公爵記念事業会から出た「公爵桂太郎伝」の人名索引には、なぜか「桂二郎」は一度も登場しない。

だが、同じく大正六年に出た当時の紳士録である『現代防長人物史』では、「殖産興業の元勳たり、中

桂太郎と桂二郎

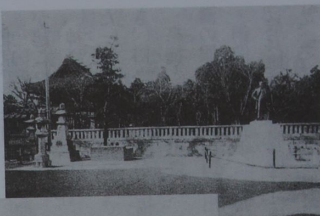
ところがここも銅像にとっては安住の地ではなく、やがて戦時中の金属供出で失われてしまった。戦後になり萩焼の陶像で再建され、今日にいたる。像のポーズは変わったが、台座も銘文も当初のままだ。リアルタイムでの支持は得られなかった伊藤の外交手腕だが、やがて歴史の中で高く評価されるようになった。歴史を紐解くと、そんな例は枚挙に暇無い。だからこそ、政治を行う者には確かなビジョンと高い志が必要なのだと思感させられる。

伊藤公銅像建設会

昭和五年十月二十六日

と刻まれた。

湊川神社に建立されていた伊藤銅像（右）



萩に移され再建された伊藤銅像



現在の伊藤陶像

中央財界ら重鎮として今や元老の地位にある桂「二郎君」に始まり、五ページ以上にわたりその事跡を紹介する。

明治の初め、二郎はヨーロッパに留学してワインの醸造を学んだ。帰国後は日本にワインを普及させるパイオニアの役を担う。開拓使廃止に伴い、明治十九年には北海道札幌の葡萄酒・醸造所の払い下げを受けている。あるいは明治二十年、東京・目黒村に日本麦酒株式会社を設立し、ビール醸造に乗り出した。二十年八月、木村莊平から社長の座を引き継いだ二郎は、二十二年十二月には製品を恵比須信仰にちなみ「恵比須ビール」と命名する。これが現在も飲まれるエビスビールだ。

その他、二郎は『新聞集成明治編年史』に集められた新聞記事から拾うだけでも、札幌製糖会社・東洋麦酒会社・東京電線会社・富士身延電鉄・九州汽船炭礦会社などの創業に名を連ねる大々実業家だ。こうした活躍だけ見るなら、桂太郎にとって二郎は誇るべき弟である。ところが太郎側の資料では、二郎の存在を徹底して無視している気がしてならない（これは私の思い過ごしなのかも知れない）。

兄弟間に、一体何があったのだろうか。

ひとつ思い当たるのは、競馬の馬券をめぐるある騒動だ。

日本で馬券が発売されたきっかけは、日露戦争である。それ以前は、純粹に観戦して楽しむ競馬しかなかった。

騎馬戦における日本軍の弱さを痛感した政府は内閣直屬の馬政局を設け、馬の改良に本腰を入れる。馬

政局の総裁となったのは、桂兄弟と同じ萩城下平安古の出身で、第一次桂内閣の大蔵大臣を務めた曾根荒助である。

さらに需要拡大と競馬人気を高めるため、馬券が発売されることになった。政財界人により東京競馬会がスタートしたのは、明治三十九年（一九〇六）五月のこと。以後ギャンブルとしての競馬は全国に広まり、絶大な人気を集める。

ところが十分な議論をせぬまま始めたため、司法省などを中心に馬券発売は賭博であるとの非難が沸き起った。こうして明治四十一年十月、総理大臣桂太郎の決断で、馬券発売は廃止された。

ところが翌四十二年七月になって、大規模な競馬賭博が摘発される。

当時の新聞によると雑誌「馬区世界」社長が胴元となり、「競馬狂の紳士連」を客にした賭博が発見し、各界の名士が拘引されたという。実はこの中に桂二郎があり、後に罰金刑を受けている。

皮肉な話で、太郎の面目は丸潰れになったのは想像に難くない。他にも二郎は先輩実業家の疑獄事件に関わるなど、何かと派手な話題は尽きなかったようだ。この辺りに先述のような、何らかの事情がある気がする。

ただ、二郎が太郎の尻拭いをした話もある。太郎が明治三十七年、神戸の旅館の仲居に生ませた露子（のち真佐子）を、太郎没後、井上馨の声掛かりで二郎が養女として育てたのだ。この娘は大正十年、十八歳の時に法学士中村銀作に嫁いだ。その際桂家から一万円の手参金が出たという。

防長孤児院

日清・日露と続く対外戦争に勝利した明治日本には、浮かれムードが漂っていた。しかしその陰では、戦争によって親を失った孤児の問題が深刻化していたのである。

当初、国家は孤児たちに十分な保障を与えなかった。このため、孤児の多くが路頭に迷った。ようやく注目され始めたのは日露戦争あたりからで、一部は小学校の特別科で養育されたりしたが、根本的な解決にはつながらなかったという。

見かねた篤志家たちは、各地で孤児救済に立ち上がる。まだ「福祉」という言葉が無い時代だ。

最近映画化もされた岡山孤児院の石井十次をはじめ、上毛孤児院の宮内文作と金子尚雄、熊本貧児寮の堀林虎五郎、東京孤児院の北川波津子などがよく知られる。

維新の元勳を多数輩出した山口県では明治三十三年（一九〇〇）一月、現在の下関市長府の覚苑寺境内に、住職進藤端堂が「防長孤児院」を開いた。これは、同県における民間児童福祉事業の嚆矢と評され、日露戦争当時は四十人もの孤児が収容されていたという。

ただ、篤志家たちの熱い思いとは裏腹に、孤児院の多くはつねに経営難に苦しんでいた。

寄付金だけでは運営できず、はたき・ほうきを作り、あるいは行商に出るといった、孤児たちの労働に頼らざるをえない施設もあった。あるいは残飯をもらいに、毎日歩き回ったという話も伝わる。

こうした情勢の中、覚苑寺の防長孤児院に支援の手を差し伸べたのが、長州出身の政治家杉孫七郎と野村素介だった。

杉は萩城下江向の出身。幕末には藩主小姓を務めたり、幕府遣欧使節団に萩藩を代表して参加するなど活躍して維新を迎えた。明治政府に入って、宮内大輔や枢密顧問官を務めている。

野村も幕末には藩校明倫館の舎長や藩主側近、維新後は文部大書記官、元老院議員、貴族院議員を務めた。

杉も野村も、志士として高杉晋作のようなスター性があるわけではなく、政治家として伊藤博文のように頂点に立ったわけでもない。それでも能筆家として知られていた二人は、自分たちの書により、孤児救済を考える。それは、日本が近代化を進める中で生まれた小さな犠牲者たちに対する、元勳たちのせめてもの償いだったのかも知れない。

杉は設立当初から大正九年（一九二〇）に没するまで、二十年にわたり夥しい数の揮毫（きごう）を続け、防長孤児院に寄付した。

野村は大正三年十月、筆硯を携えて帰郷。三十日あまりの間揮毫を続け、作品のすべてを防長孤児院に寄付した。

心ある人々は彼らの書作品を求め、防長孤児院を経済的に支援した。現在でも山口県の古い民家を訪ねると、必ずといっていいほどお目にかかるのが、杉か野村の書だ。杉

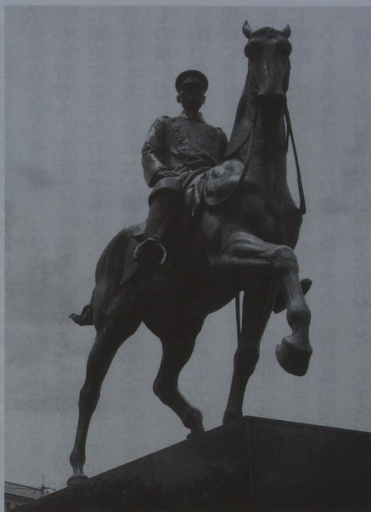
山県有朋は近代史の中で「悪役」である。軍国主義の権化である山県が、日本の進路を誤らせたといった評価が定着している。慎重で権謀術数にたけ、自由民権運動や政党を敵視したというのも、陰気な人物像を形成する。だが、山県という人物は本当に「悪人」なのか。調べてゆくと「悪役」を演じさせられてしまったのではないのかという疑念が沸く。

山県は、萩藩の中間の家に生まれた。中間とは足軽の下に置かれた、最下級の武士である。幕末の風雲に乗じ奇兵隊に参加した山県は、攘夷戦争、戊辰戦争など数々の戦いで功を立て頭角を表す。しかし、幕府に傾く藩政府の打倒を決意した高杉晋作が八十名を率いて下関に決起した際、慎重派山県の率いる奇兵隊は動かなかつた。それゆえに常識的な山県の言動は華やかさに欠け、大衆人気を得るのは難しい。

明治に入って山県は、近代陸軍の創設に尽くす。徴兵制を実現させ、陸軍卿・参謀本部長などを歴任し、陸軍大将・元帥となり名実共に最高指導者としての地位を築く。宰相の椅子にも二度座り、公爵にも列せ

山県有朋の再評価

は聴雨か重華、野村は素軒という号を用いている場合が多い。中には一世紀という時間が経ったため、誰の挿毫か分からぬまま飾っている家もある。



萩市江向の山県有朋銅像
北村西望作



防長孤児院を支援した杉孫七郎

られた。

このように、太閤記なみのサクセス・ストーリーを歩んだ山原は、大正十一年（一九二二）二月一日、八十五歳で没した。国葬だったにもかかわらず、参列したのは軍人や政治家、役人といった公人ばかりで市民の姿は少なかったという。

平成十七年八月のある日、山原曾孫夫人の睦子さん（山原有朋記念館長）と、ご子息有徳氏が来萩され、萩市長と会食した。私も同席させてもらったが、話題が「日露戦争」に及ぶと、睦子さんはもつと世間を知ってもらいたい山原の面として、次の二点を挙げられた。当然ながら子孫としては、山原の不人気が気になるらしい。

ひとつは陸軍参謀本部総長だった山原が、陸軍大佐の明石元二郎（福岡出身）を欧州に送り込み、ロシア革命を支援させたという史実。

山原は百万円（水木楊『動乱はわが掌中にあり』へ平成三年）では、現代の金額にすると七十億円余りとする）を明石に託し、ロシアを内部から崩壊させようとした。

これを知ったドイツ皇帝は、明石一人の働きが満州の日本軍二十方に匹敵すると驚嘆し、ロシア側に講和を強く進言する。

もうひとつは、山原が日露開戦に対し、実は慎重派だったこと。開戦四年前に書かれた山原の意見書では、ロシア南下政策に対する強い危機感を示しながらも、日本が譲歩する余地ありとしている。また、開

戦半年前になってもなお、桂太郎総理らの開戦論に慎重な態度をとっていたことが分かっている。

だが、日本が勝利すると、祝賀ムードの中で山原が開戦に慎重だった史実は消され、忘れ去られてゆく。現在でも、山原が開戦論に移行した時期については諸説がある。慎重であったことを隠すため、故意に不鮮明にしたからではないか。

睦子さんは言う。

「昭和天皇は太平洋戦争に本当は反対だったそうです。『山原が生きていたら、こんな戦争は起こらなかった』と言われたと聞いています。」

昭和天皇の感慨が意味するところは大きい。明治以来、連戦連勝の日本では、山原のような慎重は美德にならなかつた。手痛いしっぺ返しを受けるのは、太平洋戦争の敗戦時だろう。さらに六十年を経た現代で、果たしてその教訓は活かされているのだろうか。

日露戦争の戦勝記念碑

大國ロシアに打ち勝った日本国民の喜びは、各地に建立された戦勝記念碑を見ても分かる。萩市では越ヶ浜明神池ほとりの厳島神社に、それが建つ（写真表紙裏）。台座四方には細かい字でびっしりと、建碑

に尽力した地元住民の名が刻まれている。その碑銘は次のとおりである。

正面「日露戦役紀念之碑

〔元陽侯爵山縣有朋書〕

右側面「明治二十九年四月十二日建之」

台座右側面「大田金藏・末益米藏・広田甚吉・中野金樞・井町勘郎・松田元藏・浜本音松・末武伴藏・土田安吉・杉本音松・三芳三吉・榎本音松・石飛倉松・末武与一・井町朝吉・榎本梅吉・阿部惣松・□□卯一」

台座正面「新谷五一・吉光甚吉・井町長一・吉川松藏・井町三二・藤田甚助・岡村音藏・石飛□吉・山里元熊・山下梅吉・吉村甚吉・山本松藏・末武音松・境屋三吉・井町松三郎・木村末吉・石川三吉・井町五郎吉・末武吉五郎・小池嘉助・大津知一・末武精作・阿川三三・藤田益藏・富田徳藏・兼本武吉・刀祢□□・藤田松藏・秋守□松・小川□□門・境屋庄吉」

台座左側面「末武音一・中村梅吉・藤田□□・秋田□藏・末武友吉・秋芳徳藏・上村□松・守永末松・中村治郎吉・中村作藏・浜村萬吉・中村五郎吉・藤田吉藏・石川藤藏・末武孫一・阿部秀吉・杉本権吉・末武孫一」

台座裏面「長富菊太郎」

萩を知ろう！萩を楽しもう！萩を伝えよう！

シリーズ「萩ものがたり」⑧のご案内

A5版 62頁 定価600円(税込)
お申し込みは直接、下記「萩ものがたり」まで

萩は「巨樹・古木」と共存するまち、「これほど巨樹・古木が、残されている都市は珍しい。萩に現存する代表的な56種を樹木医が写真・エッセイで紹介。豊かな自然が残るまちとして、萩を再認識できるこの本を手に、萩の巨樹・古木を訪ねて欲しい。



萩の巨樹・古木
草野隆司

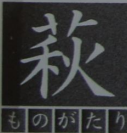
- 既刊 ①萩の椿 吉松 茂 600円 ②高杉晋作100問100答 一坂太郎 500円
③萩開府 北村知紀 600円 ④萩まちじゅう博物館 西山徳明 600円
⑤松陰先生のことは 萩市立明倫小 600円
⑥密航留学生「長州ファイブ」を⑦萩と日露戦争 一坂太郎 500円 ⑧
⑨吉田松陰と現代 加藤 周一 ⑩

第5回(平成18年4月)発行予定

萩ものがたりは、定

年会費2,000円にて、年間4タイト

* 定価割引の特典があり、確実にお手元に、送
お申し込み方法 ハガキ・FAXでの申込
電話・インターネットで
会費のお支払い方法 申込みと同時に郵便振替
銀行からの口座引き落とし



有観責任 萩ものがたり
中間法人
〒758-8555 山口県萩市大字江向510番地
TEL 0838-25-3233 FAX 0838-26-5458
http://www.city.hagi.yamaguchi.jp/portal/story/index.html
E-mail story@city.hagi.yamaguchi.jp

※丁本・乱丁本は発行所宛にお送り下さい。送料発行所負担にてお取り替えいたします。

刊行のことは

山口県萩市は、本州西端に位置し日本海に面します。江戸時代は毛利三十六万石の城下町として栄えました。幕末には吉田松陰をはじめ多くの逸材を輩出した明治維新胎動の地として知られています。

このようなことから全国に例をみない近世の都市遺産、明治維新関係史跡や史料、近代日本の礎を築いた多くの人物に加え、北長門海岸国定公園の自然美など「宝物」ともいべき資源に恵まれています。

しかしながら、明治維新は風化しつつあると言われるように、かつては萩に伝承されてきた物語などが消えつつあります。

毛利輝元が安芸の国(広島県西部)から萩の地に移封され、開府してから、平成十六年(二〇〇四)は四百年の節目となります。

そこでこれを機に、萩に残る厚みのある歴史文化・人物、豊かな自然、多様な行事や風物、民間伝承、伝統産業など、後世に語り継ぐべき萩のすべてをブックレット・シリーズ「萩ものがたり」として定期的に刊行し、後世に伝承するとともに、全国に向け発信することとしました。

読者の皆様が、この小冊子を活用され、萩の素晴らしさを楽しみ、理解する一助となるよう願っております。

《著者紹介》

一坂 太郎

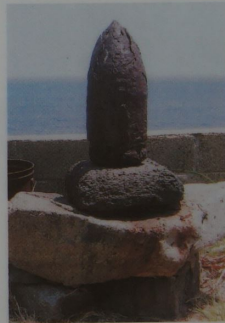
昭和四十一年兵庫県生まれ。大正大学文学部史学科卒業。東行記念館学芸員を務めるが同館閉館により退職。現在著述業。萩市特別学芸員(萩博物館高杉晋作資料室長)、防府天満宮歴史館顧問を務める。最近の著書に「幕末歴史散歩・京阪神篇」「同・東京篇」「長州奇兵隊」以上、中公新書、「松陰と晋作の志(ベスト新書)」「高杉晋作100問100答(萩ものがたり)などがある。



H216 N5

定価 500円 (本体476円+消費税24円)

いまから百年の昔、日本の政界・軍部の要職は萩出身者で占められ、「長州の天下」と呼ばれていた。東洋の一島国だった日本が、大國ロシアに戦いを挑み、勝利したのは、そんな時代の話である。また、萩の海岸には日本海海戦で敗れたロシア兵が多数漂着して来た。日露戦争と最も深く関わったまちが萩なのだ。日露戦争百年を記念し、風化させたくない誇り高き歴史を記録する。



萩市立図書館



110486446

Vol. ⑦
萩と日露戦争

2005年10月1日 第1刷発行

著者 一坂太郎

発行所 野村興産

印刷 有限責任中間法人 萩ものがたり

印刷 有限会社マシヤマ印刷

6
5
萩

ものがたり